古今俳諧明題集　一

へ5
1529
1

和羽破このみ乃世しは
片羽なきちもむかなける
と人に乃てさめるこし乃
をふはていもしさは是に
かたふくる母乃ちる理きまま

門 利 ・ 號 1529 ・ 巻 1

君ゑ能た理日見し千ゝゑ
二十年あまり三とせにゝ
渕了旦尓ゆるすもなほ
行引乃ふたゝびなきを
あらはしぬにふしへなき

おもふ人伊か二へなき
こゝろなほまさらめや
あ

藤原俊成

○又片歌と唱ふる因縁ハ其のはじめ先ニ表向音なるどもの
冊子に出しぬれど。今つゞりにハ記さね。おほかたにいはゞ
皇朝のうたに異国の言葉をまじへて俳諧とせられハ譲り侍る。
又なくハこそあれ。さまでにいにしへの人片歌とつゞけ侍るハ。
今の発句てふものゝあらばや。古き物おほくハ旋頭歌は
片歌にして十九言。短歌なれ片歌ハ古事記に出て侍り。浜はちどりの
おし。今の世に行はるもの也いにしへに拠あれど。委しき也
此なひゆく片歌と唱ふる事のことばの詞書ハ世の俳諧を手振るな
ありてむしろ侍も守え侍れど。やつがれも思ひ侍る事ハ
正しべきにあらく正し。されど国風にハ論なくいふさぬ

にもいひかよへてぞ給ひしばらくのひさ侍りその八代集にはえらミ
出せざりし巻なみけにありけれどいにしへより片歌をも載（ノセ）侍りて
広く時世のさまもしらしめ又いにしへよりこの先人のため
まれ。蓋俳諧の初めとするべし侍りハ世の意あり
○此集せむとせしやうのはじめまでに梯本ぶ詞をもへらしかば思ふ
に事の足らはざるやうぬ。又十ら許をうりぬさらさや補ひたり
しを。むかしの書（かき）ぬいちぐらしにはてらむといひしがそれをまた給ふ
ゆるさたらもてでうけひらに。そのちをもちらち此集ならうつし
まし侍人おかくまるてひらりて世に出る部集ともがらを写
しゝ侍るおもを見ねに。おもてさあやまりてそハちまるとの一ト川
ぐまのしあしたなむ愚くもつらびになりにまかくてらむ歌

ひとつの罪なきりぬ人のおもしろきをあやまれるに取られたり此二ツ方
三ツ歌志らまりにおもひたちてせうにえらまさだすむこしか
もかりにかつ侍ふ侍人あるさにあるを作りて此集に拾ひ入ららむ
事をおもひ或ハ拙ぐる其詞どものまらび然てあるをも。とて
来て日にちかかかハ千まま紀は及ぶさ禿だ清き鑑（かゞミ）にかけて
あらはそしてききむ侍とにもつらし○ど峰聖はゞ意におの
しを見ゆるハかいのけ。又かるひとつとおぼゆ侍その八数こ
もうせなくらいつし孫給ふに。彼志れ侍人の室としりむ
名ハおほかれども。ひとつを出すむすのいとおくだかゆ侍ハ。
並りさやつりまがよく其名をといふ気ず侍るあるなむ
○久しく耳にふれ目にあひ侍詞をも其句かんぬしに

思ひもたゞさで志らせずあるをたとへもひくしるしたがひめ
のつくりむも飛ぶまくハゆるし給へ
○芭蕉麦林をはじめ先生家の集どもの詞どものハおほく出さぬ。又
其集に見えざる詞を拾ひ得て出せるもあり。
○合(ヨス)圍の廣き境に世ばしばにあそびて名づけ侍らぬ人いと志げく。
其中に句ぞ妙(タヘ)なる謗にあやまりあるのさへに作りむをつくりに識と
なる詞ハやつがれが筆の及ばざる所し。又さる歌の句もあるかなざらまくハ
正しからねば日の緯(ヌキ)日と経(タテ)をまちこ演説砂の数よりもさても
ハいとかく記事するで志らぎたとへおなじおもむきにつくる
たくむもさハ先づ其数をのぞき侍りぬハいさくさて。又一字
だにたがひまくハさよしあしをえ拾ふまじもいのなし。

○和歌明題集といふものは世をひろくしれるかたをくり出しぬ。それらの言ども
撰び出せるもおほかたにまた見ゆる物の名のもとを出せる諸多の
題どもを句ども人にはまゝそのはいはれ。
○句を書つゝる所はつゐでハよきあしきをえらみて上中
志もと定めるにもあらず。まして古き人今の人のけ
ぢめも分けつかいまくハべき事にもあらでたゞ時やつがれが
筆のまにく思ひ出るまゝのみ志るべし。
○句は詞にはおほく見えざる歌ハゐなかのひなびたるもたのしく
古き書の拠(ヨリトコロ)あるをとりていづれ蓋雅言(フミコト)をすてゝよみならハ小詞の
あやをうるをこのめり。又字綴(ツヾリ)に誤りしてもさうにもとべしば
句によりてはそのたがひめこのめりんむ人見をていかでか見えん。

○古き記どもにも定かならねば。中にまれにたゞひ
まかりてあやまちをすて伝へ侍事ハ出さねば。ちまたやまひの
せちに蜘(ヒ)綵(サイ)をかざる。夏の夜ぐへに給ふなどいひ出。武ハ六月出
朔日の窓の句作るたぐひハ世に久しく行くまのあるを
あはしるべからず。いはしのしるむべきにもあらず。ことに行るるハ
中下ざまのたぐひにあらしへ侍るとおかし。それが中に女七夕男
七夕とおぼえずる神道を神のみなるべちまちの役にあや
まちまする侍たぐひ。あるハ諸ハ諸青のさまひとのいひて月
と定めがたき侍るなどの事どもハたゞしく出さぬ。
○句作ぬしの国里すく志をかき侍ハ出名のかゝりにハ
つけ侍らざるものなり。侍ハ志のさまで。

○記にかきしばしば事を詞にまうるも文字のあやまちを数ゆるも。
および此集にハいあることへていかでか中にやましにかなるをかへ。
出来時ハ本よりなるまをまで久しく伝へ侍事ぞ今あるをあげて記ぬ
此事文字と訓とひとつにしてひるへ侍るたぐひも此からもはやまし故
にあまりにおかしき事などはかして疑ふべきに用ゐることを見る人に
惑ひても彼是ちはせちと定めがたき記ぬハ文字にあるべきにも詞にあるに
かゝづらひ侍るもあり。後の人よく見を正しゆく。
○和歌に読ハ其字のとにして文字に違(ヤク)なし。よりて世に此方人見を正し
あることぞ侍ハよべし文字こゝ唱あまた人ハあまりに用ゐ侍るハ違(ヤク)なけ
ればおのづからにおなし事なればとさ侍るとにぞ。
○古人にある生まのなを正し。いふ一へをさしはさみ今をかゝげへはみそき

山のそこをつくしてあはれとおもふことのはいあらはれたる句ともおほかれど此ハ
人をしれるさとのことからもちて世の人見にんをよせまてしに今の俳諧にふ
るのハひとしれずあやまちにいつハりをはぐのこりすくなしあらぬ文字をさく
作者いでて名は事にもまなし得んだもしらぬ人ハいよいよすくなしひかんれしく
添くるかりてゆるさぬ発句を罷添させうすきしきや今家にあらしむ
俳と百かひとりなりむもて葉の人あなよりて志を興(オコ)さバある歟
草木の名を志ほていふ者にもかるひはしむか。

○凡あらたなる俳人さぐくの中にもまず皇朝(ワカクニ)の事にあそばれなば
もちつけはまなし又おのれふ面あやまくかくりしに志るせ俳ものおまへん
あれども自ハすぐらん事かちに出むをまうしこの俳べりき。

宝暦癸未の頃九月穀日東都吸露庵のあるじ涼袋作之

古今俳諧明題集春部目録

年内立春(子ンナイリツシユン)　初葉　立春(リツシユン)　二　従初至
新水(ワカミヅ)　二　屠蘇(トソ)　二　福寿艸(フクジユサウ)　二
着衣始(キソハジメ)　三　試筆(ノデハジメ)　三　蓬莱(ホウライ)　二
懸想文(ケサウブミ)　三　破魔弓(ハマユミ)　三　少児恵比須(ワカエビス)　三
馬乗初(ウマノリゾメ)　四　船乗初(フナノリゾメ)　四　弓始(ユミハジメ)　四
釋初(スキソメ)　四　商始(アキナヒハジメ)　四　謡初(ウタヒゾメ)　四
萬歳(マンザイ)　五　春駒(ハルコマ)　五　浴室始(ユドノハジメ)　五
粗公(サルマハシ)　五　鳥逐(トリオヒ)　五　傀儡師(クハイライシ)　五
人日(ジンジツ)　七　若菜(ワカナ)　七　従六至　福沸(フクワカシ)　七　小松挽(コマツヒキ)　六
甲胄読祭割(ヨロヒノカガミワリ)　七　帳釘(チヤウトヂ)　八　開蔵(クラビラキ)　七
水掛祝(ミヅカケイハヒ)　八

番下 八　常陸帯神事 八　縣召 八
粥杖 九　藪入 九　花燈夕 九
御忌 九　春風 従九至十　余寒 十
春雪 十一　春雨 従十一至十二　霞 従十二至十三
魚上氷 十三　雪消 従十三至十四　雪間 十四
水温 十四　下萌 十四　芹 十四
女夷 十五　款冬花 十五　木芽 十五
木芽漬 十六　甲折 十六　罌粟新葉 十六
芽独活 十六　蔊菜 十六　新草 十七
薹心 十七　苔脯 十七　鶏児腸 十八
松花 十八　梅 従十八至二十　柳 従二十至二十二

鶯 従廾三至廾四　鰆残魚 廾五　乾雪鰾 廾五
二月堂行 廾五　釋奠 廾五　薪能 廾五
涅槃會 廾六　彼岸 廾六　治聾酒 廾七
水口祭 廾七　初午 廾七　朧夜 廾八
朧月 従廾八至廾九　焼野 廾九　陽炎 廾九
紙鳶 従廾九至三十　鷹化為鳩 三十　春鷹 三十
雉 従三十至卅一　告天子 従卅一至卅二　知更雀 卅二
宇曽 卅二　未都牟之理 卅二　百千鳥 卅二
鳥尾 卅三　鳥巣 卅三　黄雀 卅三
帰雁 卅三　燕 従卅三至卅四　水鳥帰 卅四
鹿角解 卅四　猫嬬 卅五　啓蟄 卅五

翻蝶（コテフ）　卅五
蜂窠（ハチノス）　卅六
蝱（アブ）　卅六
蛙（カハヅ）　従卅六至卅七
田螺（タニシ）　卅七
蜆（シジミ）　卅八
寄居虫（ガウナ）　卅八
合寄風（カヒヨセ）　卅八
耨圃（ハタウチ）　卅九
秋田（ナハシロ）　卅九
麻蒔（アサマキ）　卅九
播種（タ子オロシ）　卅九
蕨（ワラビ）　従卅九至四十
筆頭菜（ツクヅクシ）　四十
蒲公英（タンポヽ）　四十
春菊（シユンギク）　四十一
菜花（ナノハナ）　四十一
珊瑚菜（ボウフウ）　四十一
野蒜（ノビル）　四十一
萵苣（チサ）　四十一
藕掘（ハスノ子ホリ）　四十一
萍始生（ウキクサハジメテオフ）　四十二
紫蘀（ツノグムアシ）　四十二
菊秧（キクナヘ）　四十二
菊卜栽（キクウヱカヘル）　四十二
胡頽子（ナハシログミ）　四十二
芥菜（カラシナ）　四十二
野蜀葵（ミツバ）　四十三
辛夷（シデコブシ）　四十三
迎春花（ワウバイ）　四十三
連翹（レンゲウ）　四十三
山茶（ツバキ）　四十四
揷枝（ツギホ）　四十四

出代（デカハリ）　四十五
雛像　四十五
鬪雞（トリアハセ）　四十五
潮盡（シホヒ）　四十六
硯採（スヾリトリ）　四十六
春霜（ハルノシモ）　四十七
踏青（アヲキヲフム）　四十七
壬生傳奇（ミブキヤウゲン）　四十七
御身拭（オミヌグヒ）　四十七
順峯入（シユンノミ子イリ）　四十七
鎮花祭（ハナシヅメノマツリ）　四十七
爐塞（ロフサギ）　四十八
長日（ナガキヒ）　四十八
田鼠化為鴽（デンソケシテウヅラトナル）　四十八
麦鶉（ムギウヅラ）　四十八
鳥入雲（トリクモニイル）　四十九
蠶（カヒコ）　四十九
櫻貝（サクラガヒ）　四十九
櫻[?]魚（サクラタヒ）　四十九
櫻魚（サクラウヲ）　四十九
小渓鰮（ワカアユ）　五十
上簗（ノボリヤナ）　五十
紫花地丁（スミレグサ）　従五十至五十一
荷花紫草（レンゲサウ）　五十一
茅鍼（ツバナ）　五十一
鼠麹草（ハヽコクサ）　五十一
白頭翁　五十一
薊（アザミ）　五十二
木瓜（ボケ）　五十二
裙帯菜（ワカメ）　五十二
芋種（イモウヱル）　五十二
桃（モヽ）　従五十二至五十三
櫻（サクラ）　従五十三至五十七

海棠（カイドウ） 五十八
金棣棠（ヤマブキ） 従五十八 至五十九
石南花（シヤクナンゲ） 五十九
郁李（コウメ） 六十
採茶（チヤツヽミ） 六十
春夕（ハルノクレ） 六十一

梨花（ナシノハナ） 五十八
瑞香花（ヂンテウゲ） 五十九
紫荊花（スハウノハナ） 五十九
玉蝶（ニハザクラ） 六十
梅新生葉（ウメノワカバ） 六十
暮春（ボシユン） 六十二

躑躅（ツヽジ） 五十八
木蓮花（モクレンゲ） 五十九
笑靨花（コゴメバナ） 五十九
五加（ウコギ） 六十
紫藤（フヂ） 従六十 至六十一

古今俳諧明題集春部

年内立春（ネンナイリツシユン）

春の日をたしして惜むやとしのうち　大和柳本　去路

ゐらゐのしかえる春やとしのうち　近江日野　し路

年のうちの春やたしかに水の音　加賀松任 千代尼　素園

としのうちに白の色えにやうめの花　伊勢山田　麦林

鶯（ウグヒス）も来るの粗率（ソツ）でもなし年のうち　同　兎士

こゝろ春ハ立なからしのうち　江戸　破了

もちき日に出て急がしとしのうち　肥後熊本　汶上

児（コ）んにさしきたるや年のうち　武蔵西谷　西羊

結びて炬（コタツ）へまかり福寿草　同戸室　巴臣

手のうちへ溜(タメ)て見ゆるやちる乃遊きか　大坂 一嵐
としのうちに来し旅いとゞ霞(カスミ)けり　江戸 柳居
旧としの鶯へ折りてむかしこの外　南都 白枝
としのうちに宝よいれる冬の春　下総佐原 青藍
小ぎりし直(スグ)ゞ居るくらとしの内　涼袋
もう年の外(ソト)て霞(カスム)や冬来立　仝

立春

浦の春ちどりも飛びぬけて　涼袋
月のうちとめけてやとしの初鳥(ガラス)　伊勢山田 温故
ほのぼのと鵜(カラス)くろむやまずのちる　大坂 蹄坡

春られや蔓花(ツヅラ)の初(ホツ)の影(カゲ)よ春　加賀金沢 希因
ちるまでやとかくままと鶯とおもしろに　涼袋
折ぶる人つも来らり花の春　武蔵熊谷 雪叩

福(フク)寿(ジユ)艸(サウ)　漢名 赤陽

若(ワカ)さうれ蕾(ツボミ)の形(ナリ)や福寿草　白枝
あけぼのハ紙(ヒダ)うてちやし福寿草　京 安里
此ぶよ日の色あげやよく寿草　西羊
肥(ハヒ)をふ子の道まへや福寿草　武蔵 洗雪
雪と手八ちも跡らしよく寿草　涼袋
啓明星まてもゆうび福寿草　江戸 維想

出る日と同年なり福寿草　武小山 鬼洲

新水

汲みや恋をこぼれて溢るゝで　麦丈

こゝろや日も釣瓶かしてやる　武青梅 涼宇

屠蘇

屠蘇乃香やあやめも菊も匂へども　京 元女

蓬莱

蓬莱や叢よもの いひそしめ　上毛妙義山 一音

着衣始

袖の座ひよつ捨うり若衣始　江戸 渓奥

屠蘇の香の痕へ熨斗やきそ始　佐京 秀琨

試筆

交譲木ハ我多羅葉やまたじめ　伊勢川崎 梅路

行灯ハ火鉢のあつてまはじめ　武井上 文東

ゐるほどれるの紐つけてまたしめ　し路

少兄比須

古今俳諧明題集巻之一

ひとりづゝ人ハ老わかえびを　左京 雲和
いとゆふもちぢまる日ありかえびん　下毛那須 百尋

懸想文

懸想文こしも買て分つのしき　汝上
懸想文紅き袴の新人照　きおの小金 和暢
懸想文おも買めも鏡もなし　一鼠

破魔弓

ちまたやかぶ行よハ乳をおちぶら　甲斐笠原 不残

弓始

佛も出るもめでたし弓ぢ光　近江膳所 昌房
光陰見せて弓はじめ　青蘆

馬乗始

乗始や先ず桜にも繋ぐ也し　伊勢山田 亀之
のりぞめや梅に白沫よつくり　上毛境 茂畔
乗始よ雪やおりて白鞍馬　下毛足利 可孝

舟乗始

乗始や江方へ向かふ舵のおと　大坂 まさぬ

謡始(うたひぞめ)

うたひぞめ衣文(エモン)つくろふて口を開(アキ)　青梅 巴兮

釋始(ときぞめ)

ときぞめや一家(イッカ)の風もをさまりぬ　武中 布圃

商始(あきなひぞめ)

売始や蕾(ツボ)むハまけて福寿草　日光 此君

浴室始(ゆどのぞめ)

先(マヅ)嬉(ウレ)し浴室(ユドノ)にふみの吹(キ)ぞめ　蓬戸余子 若志

若菜(こんサイ)

若菜れにやちからハつくるとも　素園

万菜やまぼめてたいる髪(カミ)打戸　柳居

若菜や菜の花ハよそおとし　武山大之 未了

青胡麻(ちるごま)

まち鶏や寺子にんゆるし　咄

傀儡師(クハイライシ)

武蒼谷 結雨

若よ痩て恋せぬ猫や傀儡師　汶上

狙公（さるまはし・さるひき）

風呂敷の縁うけもあるとさるまはし　上毛前橋 黄牛

狙公や春の盤よ月ハ謡されじ　高崎 笑林

つけるの八人の智恵なり狙まハし　備お 東起

狙公や猿の縁よあし乃痕　お播 笑洲

鳥逐（とりおひ）

鳥逐や粟よまくべき形でなし　三雅

小松挽（こまつひき）

いつの今日挽捨しやむかし松　破了

爾へまる風やおさくて小松挽　武州中 吐雲

人日（じんじつ）　新菜　七種

あらしこ鶏逐ふて若菜かな　江戸 湖十

きのふまでおそろしき身よ若菜かな　希因

百姓のゆるりと見ゆれわかなかな　江戸 祇丞

手居りふ落て埃しまる菜摘　同 秋瓜

白いよの雪まつもるかれかれ　素園

鶏のくなくて逃るさかれ一の声　一嵐

跡に近きむしれ京やわかなつゝ　一音
庖刀(ホウテウ)で小松をきざる若菜かな　涼帒
摘(ツメ)らぬ鶏(トリ)のあしや見られはゝ　仝
傾城(ケイセイ)に追手(オツテ)のかゝるつまれこの節　古山
挿(サゲ)て出(デ)る笠の帯や若なつゝ　雲里
袖ひとつとめてゆくるやわかれつゝ　双飛
雪ハもう地の跡(スキ)延(トホ)る若菜この事　晩九
ゐなかるを志らぬハゆかし若な摘　雲郎
ましよみ田せれ見られこの節　雛山
道草もさしまる日あまりわかれつゝ　冠子
驚(タカ)る適(ジャウ)に亭(リウテ)の前(ツロ)の若菜かれ　荻丈

大和荻原　古山
越後天林寺　雲里
武江の居　双飛
越中七尾　晩九
上毛富岡　雲郎
信濃岩村田　雛山
江戸　冠子
下総秋津　荻丈

厨もまづ日本のゐるや若菜つゝ　素蓋
青くと雪とよごまや若なつゝ　石道
分ケによる摘のちもとや見られつゝ　雪叩
附紙(ハリガミ)に指(ユビ)の跡あるわかれこの節　白志
二人(フタリ)めの宮でぬれつ若菜摘　栅波
伊豆(イヅ)も雪もまづ寒い年(トシ)時之わかれつゝ　眠石
指扇(ヒアフキ)にちのくぼゝし若なこの節　砕了
七種やとぬハ鳴る起されぞ　白枝

仙京　石道
下毛足利女　白志
日　栅波
上毛大田　眠石

福沸　かこ

福とり掛栗(カケグリ)ひとつ嵐(バ)にあはれ　倚舟

大隅　倚舟

松脂(マツヤニ)の匂(ニホ)ひもきこゆ梅こゝのし　肥後天草 壷渕

開扉 ひらき

押(シ)折戸(ヲリド)や我身はくゞりびらき　麦林
あまるもいの字となり扉びらき　乙路
扉びらきおそしと猫の従(ツイ)て居(ヰ)る　扶父金崎 涼戸

甲冑鏡餐割 よろひのかゞみわり

朱(ヒ)縅(オドシ)の鰕(エビ)もおろしてかゞみ割　武加須 李冠

帳釘 ちやうとぢ

帳とぢやよしみと刈(カリ)ハうるく紫　武吉柳 如毛

水掛祝 みづかけいはひ

壻(スコ)漏(フロ)へうめて添(ヘダ)まゐれいはひ　一嵐
水かけハおもちめ礼やれいはひ　涼宇
媒(ナカウト)のまゝ扱(アツカ)ふやれいはひ　いせ山田 歳暁

番下 みごおろし

よかゞんも鼻のさきこ番おろし　安里
御(ゴ)劇(タウ)のかゝも添(ワ)る番おろし　祇丞
人の目へ茎もかまはじみごおろし　江戸 又久

下るより上るが早し番おろし　涼宁

蜘蛛もまださがらぬころを番おろし　能登七尾 柔礼

志まふとき猿よ手広やよこおろし　涼袋

常陸帯神事（ひたちおびのぎんじ）

旅の緒ハ寡婦で居らう常陸帯　不見倭田 瓢十

常陸帯おもちぬ風も神ごころ　武州 教 東恕

ひたち帯おもひあはせハあまたゝき　涼宁

縣召（あがためし）

思ひなど知らぬ顔なりあがた召　西羊

土器（カハラケ）と封の顔あるあがためし　江戸 楚岫

粥杖（かゆづゑ）

粥杖やあのひもよしぬつくも髪　深田 梨明

林薯入（やぶいり）

やぶいりや蛙（カヘル）帰（コハ）る人のなまり　涼袋

やぬいても行（ユケ）ど顔（カホ）はそのかざらん　白枝

袖も入や垣（カキ）よある草摘てけり　一巣

やぶいりやおとなしくて日のちまき　武西谷 古由

やよいりや壌（ツミ）の木瓜（ボケ）も吹くし　柳居

やぶいりやあるくまろかどもらまへし　涼宇

花焼夕

燒る舎利ハらしてうめの梵　京 杜吾

御忌

綿帽子と消より御忌の山おろし　京 羅人

さえかへる御忌や十夜のすのうくて　同 麦喬

春風

春風やあるの産室も萌あそび　江戸 其椒

をりきもを吹出れ山やたるの風　加賀金沢 左菊

春の風康の角まハここまあり　山田 岸布

柳ふく春してむれや春のうせ　金沢 松丈

春海をこえてまるや春乃風　江戸 百卉

鶯ふりきびをまるやあるかうぜ　同 暁素

喰ん諦をつれてあるくや春の風　涼俳

餘寒

鳶さうは甲斯のさむく暁あこのれ　大和戒重 胡周

さくなりは日ハもうりなるさうちて　麦林

冴花のくいちぎよさる木むさこのれ　去路

まだまだ一夜ふりきてしまはれ　いせ川崎 木吾
暁くのまよをとこあすれぬてしさら　西羊
奥ハまだ尾だうり降てしさら　大和柳本 其笛
一せる紙衣へそりる降てしら　上毛ミ之倉 喜母
嗅起るみまだ從まよてしさら　江戸 烏久
鉉な奥のみぎハさつて降てしら　日 李北
比ハまだ浪ふくかゐる降てしら　武蔵西 祇翠
的背の刺杉枯て降てしられ　喰代

暮雪（くれのゆき）

足もまでうこれまでうそてその雪　美濃黄山 文考

大名の身でかうるや　くるのゆき　尾張 巴静
京へ出る時ハ見まやくる乃雪　柳本 六柿
よしみよハ見もおくあり春の雪　江戸 桐原
中天よ増え見しくる夕ゆき　云路
あちこちのない歌の富士や春の雪　一巣
帰よセて一日おくや春のゆき　双兎
吉もまだ後出ましてけさの雪　山田 入楚
杉ハ高まりぬそびありその雪　常陸午安 画州
屋根バかり降とうくしくり春の雪　今沢 大阜
横よ陰こうろあちや暮れゆき　武子 林江
道絶て又山まや暮れのゆき　涼宋

竹の葉をくハつて枝もはるの雪　涼帒

辷るほどおぼしておくやはるの雪　順桑

夜ハ霞て月まで曇しはるの夜　下野 史丸

はうちに青きを踏やはるのゆき　一萬

春雨（はるさめ・はるのあめ）

はるさめや帰るまでよ飛ハかんこ鳥　百舟

有しよい琵琶のおめやはるの雨　武シダミ 士風

脣の乾く嫗やはるのあめ　一嵐

萎ふ脚巓の羽織やはるの雨　冠子

鍋常菜うも潮の溢潤やはるの雨　金沢 如本

はるさめや門ハ柳の八重葎　江戸 李趙

はるさめや蓑うもさはる傍のあり　上毛古海 笆叩

はるさめや物の執らぬ流れおし　西羊

瓷甕の蛙よ殺るゝやはるの雨　武八王子 保井

秧田へつゞいて行やはるのあめ　京 宗多

岩巓の巴嘉もやはるのあめ　乙路

はるさめや柳の肩れ落て居　下毛足利 漁遠

枯うし芽を出し萱やはるの雨　太阜

懐ためて柳能目ハなりかゝり　兎士

雪国の尾根静なりはるのあめ　素藍

はるさめやまださこもとの寒ずる　七尾 閑工

出しておく釈ハうましものゝ露　足利 斗白
飽かの餅をちぢめやちるの露　武蔵 柳水
黒みえてきらめく人やちる花露　淙常
ちるやむりものハ稲葉草　仝

霞かすみ

湖と富士しうあれ霞かれ　下総臼市場 矢海
挽船夫のちぎれて出る霞かれ　仝 里朝
鶺鴒のきゝいてとまるかれこゝ　双飛
ほころびて嫁のこぼるゝ霞かれ　一江
きいのがゆたたり霞のかれこ　大坂 富天

わと出て花一滴こもかれこゝ　江戸 嵐雪
ひるとて猿の居るかれこのかれ　上毛 仙竹
新のも蛍丁のふ入かれこゝ　雲郎
ひとつば、形なして出れ霞かれ　七尾 亜笑
森久から城出しして霞かれ　保練
かろじと山番りるかまくかれ　希因
ちきるよ捨あげし有る霞かれ　安里
辛崎ハ暮の雨まりやしれかれこ　桐栗
どのおのこゝろもみせぬかれこゝ　西羊
午ばるよ三穂の出て来る霞かれ　淙袋
梯の衛田とハ見えてかれこゝ　仝

魚上氷（うをこほりかのぼる）

鶯ハまらじ魚の氷にのぼるを　武八幡山 淀化

雪消（ゆきげ）

木のそらにあくさおして雪消ぬ　淀佛

永橋のよハことさき雪消かれ　李小

山ありて見さいっろにハ雪消かれ　武金杉 源戸

瘤ひとつ蚕て柳も雪消かれ　武若居 杜門

国かさつ息とるゆき消かれ　上毛太田 午山

是日かゝちの出て来る雪消ぬ　武杉戸 府志

見でよむ娘来も既に雪消かれ　江戸 茶友

飛びくは不浮あがるゆきげかれ　麦梅 洗雪

雪間（ゆきま）

嗅起るの息吹かけて雪間ぬ　太阜

山道に目鼻の出来る雪間かれ　祇丞

鈴一筋何処へもやらぬ雪間ぬ　百共

ふじの峯に人の出さほど雪間ぬ　一嵐

折絶のよしみゆる雪間かれ　深体

水煖（えづぬるむ）

めるませようつる塘岸や水の上　上毛室田　之文

居めぐるに蝮(ヌル)むハ人して水のくく　下毛一本木　思達

下萌(もえ)

下萌や上風(ウハカゼ)ハ今麦だらけ　もおか小倉　当葉

岸の草解(トケ)るほどづ萌てある　下総小見川　亀毛

芹菜(せり)

我こゝ泥鰌(ドジヤウ)の逃(ニゲ)る根芹(ゼリ)かな　文草

蕎苔(キウタイ)の髭(ヒゲ)を洗へバ根せりかな　京市

女萎(ところ)

手椀の鍬に袋やところ堀　武小山　淀洲

款冬花(ふきのたう)

脱(ヌゲ)バ又痩(ヤセ)法師なり款冬花　淀佛

うらハ又あげてひりや款冬花　冠子

枝道(エダミチ)につゞくおりふきのたう　吉路

草涼い袂を出るやふきのたう　摂大山　麦川

去年ものまゝぬかづりしふきのたう　大和柳本　呼友

わらるは風にひづむやふきのたう　西羊

飛くにもまれのこしやふきのたう　洗雪

草菴の開山像しきれなきめり
壬生日吉　四道

木芽（このめ）

又石に成換ちふて木芽このれ
江戸　大至

日あかりをみつめて鳴む木のめかな
志多見　里郷

木食の秋田ふるき木の芽この九
兎洲

くゐて臼に摺うちまれば木のめ乃れ
京　子風

ちぶさも撫て去るほと木のめこのれ
依京　一昇

多の草れ傍りし莫だむ木のめかな
深埔

花とぼれ紙縒あしらふ木のめかな
下毛　正雲寺　長尾

木芽漬（このめづけ）

塩売のくるま跡や木のめづけ
尾張　越人

香うちの児をぶよきや木のめ漬
杉前　白陀

甲折

やぶうまのまこし遠よてふるさかな
源常

あ方へ土ふりまてふる菜かれ
上毛赤石　度江

菜ハ今ふる八口あくふる菜かれ
深埔

開く時青のまるまちふるむかち
深洲

罌粟新茶

罌兀ハ散茶れありけしのわかれには　伊予山口 李中

茶摺ほめ

風ひかぬ人が寝覚もめりどかれ　武上新 綠相

やぶいりのすべつて喚もめりでは　江戸 呂舟

蘿菜

喚で見て幸子のおろしまさびれ　武小山 祇十

からしはどんハ見えぬまさびれ　上毛境井 花允

新草

新草のや夏延つめる　もりのは　浅雪

わか草や踏ぬ廟ハ捨まし　武杉戸 二毛

いつゆみに従て芒の若草かな　武村山 仙衣

新草や三郎が笛も立のかな　江戸女 霞誅

新草や我の侭に儀莫とお花し　武本庄 堀氏

わか草や性長ハ人に摘らる　武越谷 古白

新草やまだ井筒も身のまほらで　尾埼 也有

わか草や癒めんて庵とい　白枝

新草やみゆるの原のうるいとき　涼宇

わか草や爬てりくも一面きらし　温故

薹心（くゝだち）

くゝたちや小鳥の脛の低うなり　双飛

くゝたちや法候の宗旨曲てこゝら　奥白河　露治

苔脯（のり）

大海の苔を拾ふや苔脯のうち　破了

海苔や好みて殿下の浮上る　上毛館林　九皐

のどけさや海おつ苔脯の妙り　奥陸　木節

乾しあげて蝶とまるくや擬のり　上毛高岡　芳筏

海苔や鋏に乾いても浮あるき　其梅

干やうの苔脯の乾ある夕日かな　一旨

雛児膓（よめな）

うきうけにちれて出るのよめなかな　母里　女索了

あしむけて漆笠みるよめなかな　涼帯

摘すてゝ痩くを誇るよめなかな　青藍

松花（まつのはな）

大木へかよふ志まやまつの花　笑林

秋なりし情まで知るや松の花　上毛相生　鈴城

梅 うめ

山里は万歳遅しうめの花　芭蕉
こち吹といひたるやうめの風　江戸 存義
うぐひすの反魂香やうめの花　山田 茂秋
吹止て居所きらしうめの花　播西 以秀
身を出る気もこもる梅の花　江戸 大室
御見は吹とも白しうめの花　出羽鶴岡 芸錐
ことしかの皆反古なりうめの花　上毛高岡 青戸
梅咲ば気もあらたや苔の色　希因
散るしるしよことさのつるや梅の花　巴静
折りけて是は近さうりうめの花　雲郎

墨つけて花の気やうめの花　上毛板鼻 美里
梅咲やんの香る長し　琮節
占は晴天と出うりうえの花　仝
いけてのく気のをかりや梅の花　武小金井 一の盤
ね足らぬ方よ北斗やうめの花　青蓋
梅がかやえつけて燈しびと向ていり　沙奥
うめがかや先もさく近きとの　希因
浅き見る水中の月やうめの花　一青
咏まむせてきらぬ身あき梅の花　吉路
焼香まで日の入見やうめの花　西羊
それ枝のゝ後ちりみてうめの花　六柿

日の浅きも深もちりうめの花　京 祇翠

紛東の比に咲けんう気乃たれ　百川

梅が香に起て用たるし胡ぐれ　加州湊 若推

そのそくあるハ咲(サカ)ぬみし梅が花　祇丞

打木にも二日やいとや梅乃たれ　武志濃久 以孝

爪(ツマ)踏(サキ)ど忘る日ありうめ乃たれ　江戸 霓游

その文(スヂ)の画(エ)にるよりくさう梅の花　同 紙旭

偏性(カタイヂ)に磁石(ジシャク)ハむつかしうめのたれ　笹叩

かつり気の香(ニホ)ふてまるや梅の花　白枝

天水の桶ありそめてう気のたれ　志州 吟風

足くするる梅の注(キ)まやうめのたれ　女 寒苑

風吹ハ河内かよひやう気のたれ　破了

谷の戸の鑰(カギ)かけさう梅乃たれ　女 一紅

まけてまる在所の頬やう気のたれ　武州町 東梢

杖ついて他所へのびる水梅ヶ花　武川口 露槃

梅ヶ咲(サク)や何りすりも跡らしき　能登七尾 曲雪

せハしいハ老樹(キ)のくせや梅の花　近江粟津 文麦

梅ヶ香(ゲ)るや是あされバ川むかし　上毛二の倉 幻江

あとけるもの手継(ツギ)やうめ乃たれ　庭津高山 滄洲

風に香る秋ハまぐるしうめ乃花　江戸 西朔

咲(サカ)うとて南へ爬(ハフ)うめのもちな　泉福谷 呑溟

後さくめくもころやうめの花　笑牛

一つ咲二つ来るやうめのはつ花　上毛鶴田 女 雨杏

状挿の道も咲さりうめの花　一嵐

梅が香や機の枠よりしめて来　一紅

忘られて淺に梅やうめのちれ　武州本庄 兎雪

不破かくれてよい慈風や梅の花　只舟

梅咲や紙捨にゆれる水のうね　相模 秀柏

あらぬまで散るやうなうめの花　東起

柳　やなぎ

とよりかの雲と動れやなぎかな　破了

畑中に独のしげれ柳かな　加賀金沢 左蔦

根をおいてなびかぬ柳かな　素園

何ひとつ結もせぬやなぎかな　梅路

樹叢のまとひより出れ柳かな　加賀金沢 兎承

節眥にことさの疏るやなぎかな　茂秋

塗ばをて樹にあらぬやなぎかな　伊勢 岸扇

たくれてこそかはせば柳かな　古由

年蹈と鶴しておるその柳かな　一青

花さかぬ身をまぼあふる柳かな　麦林

そこまで水のつれづれ柳かな　吐涼

蜘蛛の網にまけるも日もある柳かな　希因

浅川にまめて見せるやなぎかな　太阜

起きよと柳を風のゆすりけり　鬼士
青柳のぬれてかゝるや水車　一嵐
まづ柳やゆれて松の山の形　百井
楊子ハ三節ほどいてやなぎかな　尾張 津く
月とつらく話ハゆすりぬやなぎかな　武蔵 五乗
正直なものゝ立ねやなぎかな　祇棠
正面といふ川もなくて柳かな　汶之
宿へ先根こんで居る柳かな　女扇
冠もってでハ正をやなぎかな　多兆
飛石のおもて見せるゝ柳かな　呉山
屋根みきのかゝつけておく柳かな　巴丁

大ゝしぬ地蔵の顔へ柳かな　双鹿
曳よせて居る奴の鼻かむ柳かな　加賀 勤文
新和布縫とつれて葉になる柳かな　鬼士
おしあひの備明るまできぬ柳かな　起鳳
河留の角へふきぐるやなぎかな　加賀 宜中
宮へまで寐よくとやなぎかな　鳥林
二八月山のたてきおろせバ柳かな　一宅
植樹屋のましもならぬ柳かな　乙路
紙覆ふて橋の迷ふやなぎかな　杉町
解魔法師の抱る柳かな　漁童
柳翁の後歯と接ぎて柳かな　川夕

つめたさをこらへて長るやなぎ哉　日 雪阜
早乗の畦を通して柳かな　武下 巴夕
萬りは本来知れぬやなぎかな　日 士喬
もう西へ風おしくれやなぎかな　八王子 来嵐
石燈ろうく挑よ来る柳このな　修泉 巴路
屋棟すて筏の流るやなぎ哉　素筏
山城に水ありくしやなきかな　見州 雨石
疎ぬ島と見えてまだ居る柳哉　七尾 畠浪
唇でふるのなぐさむやなぎかな　江戸 亀文
青柳や舟と話して凪てけり　上毛?根 芳嵐
文道堂に漏のこまらぬ柳哉　武本庄 圭守

吹やめはゆるより青き柳かな　玄路
晴天をさして寝ぬ柳かな　小田原 芋魁
誉しなかり乱て見てけり柳哉　常陸太山 秋袋
燈籠の肩もるるやなぎこのな　青蓋
幕とれは伸のもしまる柳哉　白枝
入にて庭泥のあびるやなぎかな　上毛 蟲戸
青柳やどちらが先て水の上　伊勢田 府旭
柳花に一丈盗むやなぎかな　涼佛
猫の耳勧して尺頼やなぎかな　今
八九間空で雨降るやなぎかな　芭蕉
後へ来る肩へかへして柳哉　あ楊 女 星露

喚起鳥

うぐひすは知らせずしらする初音かな　八王子 叱圭

うぐひすや土のこぼるゝ苔よ啼　涼帒

うぐひすや山低うして水細し　仝

うぐひすの日をあてゝ居る初音かな　仝

うぐひすや梅もて四方をよそありけり　素園

うぐひすやまた詠しよこ恋し　仝

うぐひすや谷の水音けふぐらし　城北にはぬしこ 江戸 門瑟

うぐひすも袖へひそかに初音かな

うぐひすの放してくるゝ初音かな　笑牛

うぐひすや音のむつところゑておかり　江戸 秋午

うぐひすや鏡いすとつい云はじ　同 秋扇

うぐひすや春は旭のさしてよるも　同 冬渉

うぐひすや藤る時は孫て鏡ぼりけ　同 鳥瑛

うぐひすのひとりくみ初音かな　一鼠

うぐひすの入日へ伸て初音かれ　双鳧

うぐひすや今まで嗜さ鳥は何　白枝

うぐひすの鬼壁をゆるして初音かな　李北

うぐひすや嗜すゝはちぬ来よ飛ぶ　西草

うぐひすや梅の徳さすねはへそ比　涼奥

うぐひすの雲ありぐのけて初音かな　澤媒

うぐひすやゝぶく匂ひと脱にける　名古屋　素風

うぐひすや水杓の尻のかるいとき　百井

うぐひすや雪おも菜の下に啼　希因

うぐひすや竹に小指をちゞめて居　羽黒　露恵

うぐひすやけさは儀へ紛て啼　江戸　徐来

うぐひすや舟の枯菜を踏落し　尾張　荷兮

うぐひすや梅のうづまく花になり　越前　和水

うぐひすや桃の径こゝと啼にける　涼袋

うぐひすや傍もうしろの鳴にける　笛叩

うぐひすの出口や雪の打て来　青蘿

うぐひすや柳のうしろ藪の前　芭蕉

鶺鴒巣

ちう鳥や嘴くはへて葉て見る　去路

ちう鳥や泡ともなしにくはし　いせ四日市　馬月

ちうしとやくゞる雪の消てうき　六柿

ひうとや水に君の雫も泡もあり　勢西　一の江

ちうとや紙の焦れぬ方に棲　銚子　葉汀

ちう鳥や鵜殺は外の春さ戯でけり　涼帯

乾雪鑿

乾てもまたぐ雪鑿の寒さや雪の色　仙台　東羅

二月堂行(にぐハつだう/のおこなひ)

あれや氷の僧の履のおと　芭蕉

釋奠(シヤクテン)

けふハ日ハちられど足いねバ　碩了

祭(サキ)のつくる門(モン)をも入て柳かれ　江戸 五雲

薪能(たきぎのれう)

僧ハまづ薪の寒し　水衣　涼袋

舞出れ采女やもと(ソコ)の柳より　仝

むとりの法やけさき法衣(ほふえ)上　去路

涅槃会(ネハンヱ)

涸(ナミダ)でも冗(ハゲ)るたぞ之　涅槃像　鬼士

茶の花や模(バク)も涅槃の枕とと　百川

けぐものハ恥(ホユ)る顔あり涅槃像　京 季吟

何年の寛(アガ)らを屈(クツ)して涅槃かれ　足利 洞居

涅槃会や生まごで光らぬ人も有　古山

まちあげる時や涅槃の床(トコ)がつり　大阜

ねもんむや身とちぢめても烏(ヲナガドリ)風　入楚

涅槃まうや香爐の柳はうつらぬ　武州 山州

どう見ても又起りな涅槃かな　岩槻太田 之六

涅槃像喰(トボシ)遁く虫ハ逃てけり　紙旭

おもしろい夢見る顔や涅槃像　多破

涅槃会や告でも子(ヒハリ)ハ葉どうまり　江戸 止絃

ひとり寝の姿教てねたんかな　涼袋

寝ハまておこせどもねたんかな　仝

彼岸(ヒガン)

桜さくひよくに弥陀の彼岸かな　支考

蓮ハまさに濁世にまじりて彼岸かな　汶上

新婦(ハナヨメ)の花に鉦(キカ)まいりかな　秋田 文里

午時(ヒル)飯の隣ちりみる彼岸かな　江戸 燕石

治聾酒(ジロウシユ)

治聾酒や耳(サヤツ)法方へ聞としりき　涼宇

治聾酒や振バころんでうみしき　祇丞

治聾酒やまぬんでもわぐつさ　乙路

治聾酒や怖く下戸のかしこまり　徐炙

治聾酒やかう見てまぬるだろ　汶之

治聾酒や秋りすも俤(ヒヨウ)かり　東起

治聾酒や耳ちかし山て笑ふとき　白枝

治聾酒や座ハかえて蕎氷　深林

水口祭(みなくちまつり)

まさをにほしく隠て水口祭られ　武蔵 図南

初午(はつうま)

はつ午やうぐひすなりし神の森　江戸 超波

みな午や梯は論(カギ)はまろく奈れバど　涼袋

はつ午やさらしきかゝくハ梅だらり　江戸 祇徳

みな午や茄へバ菜屋も神をかく　柳居

たりなや迷子もなく暮かゝりて　武州 伊山

みな午やうちまち隔は口だしてし　江戸 百夫

朧夜(おぼろよ)

朧夜やかんこげけくの梅だりて　素園

朧夜やあつハ床てぬるくしる　万里

朧夜や名の有そうれ早だらり　江戸 泉成

朧夜やけりくが告 気ぼうし　旅烏

朧月(おぼろづき)

うぐひすの巣に樫ものや朧月　麦水

えりけても牛の一声や朧月　入楚

粒(ツブ)こしよき花に袋や朧づき　梅路

ぢちくりわとさらにおぼろ月　希因
隣のあかりさてハ幸ちかり朧月　六柿
柳まで居(スワル)なのありおぼろ月　江戸　蓼太
懐(タモト)中のおかしあふ欄やおぼろ月　一瓢
爪(ツメ)鴫(サギ)のあれて咎あり朧月　李小
雀(スヾメ)衛ハさてむくやおぼろ月　貝梅
足本よりで下ハ人ちかりおぼろ月　白枝
わきまき庵も看取しおぼろ月　かゝ津幡　見凰
一日の人に酒(サケ)てやおぼろ月　かゝ金沢　十牛
ねいへバおくれぬ伴(ツレ)や朧月　伴山
沈れのおなくたし朧月　雲郎

笑(ワラヒ)に風ハ起ッておぼろ月　西羊
狗骨(ヒヽラギ)の人もおどして朧月　涼袋
朧月ことに馬木のをかれ　仝

焼野(ヤケノ)の

猟人(カリウド)の逐出さるゝ焼野哉　双飛
吸殻(スヒガラ)に逃げらす焼野かれ　大和林下　梅枝
款冬(フキノトウ)も一寸見えてやけの哉　吉路
鉋子(カンボウ)の居どころ知れぬやけの哉　武西谷　琴詩
石摺(イシズリ)に梅と飛(トビ)せて焼のかれ　燕山
狐の尾の有りもよくてやけの哉　播西　呉雪

陽炎(かげろふ)

かげろふに鼻あてゝめるやせるゑ　涼袋

陽炎ハ人数のみやうしずゑ　去跡

陽炎や旭(あさひ)のうく道の付く　古由

かげろふや掃(はい)ても出る鳥嬉(うれ)し　之六

紙鳶(いかのぼり)

よもしとよめくまうろ紙鳶　乙路

ころんでもうつにひくや紙鳶　徐了

大そらをとらへて居やいかのぼる　秋年

下りまいと悪音(はらだつおと)やいかのぼる　信京 佳祐

乳うろも糸の出てあるいかのぼり　小尻川 女文の

中天(なかぞら)におほしてあるいかのぼる　素筏

切て来て隣家ともや紙鳶　加賀 亀川

凧ひとつでも沖(いり)ろいかのぼる　為谷

凡山(ぶざん)へのぞきて日和やいかのぼる　起鳳

後(うしろ)より牛の後やいかのぼる　武京 得牛

おろしてハ筵(むしろ)のごとし紙鳶　上毛青柳 徐来

吹ケくと花に歌ちまいかのぼり　素園

譬化為鳩　たかけしてはとなる

粉蝶を見て化しそこね鶴の春　大和神波 自天

鶴で今ぬくめてくれる鳥の友　京 移竹

こうなつては鶴や化しても■々　笑林

春鷹（はるのたか）

来りし継尾へ走る鷙の形　上毛 琳李

尾ハ雪に逃て消さうなる鶴　京 百爲

雉（きじ）

旅人のまさ日ハあつと雉の声　涼帒

浪花へきかすもあれくきじの声　素園

なばちに疵ハつくれじや雉の声　九菊

さかるとハ花にたるさへきじの声　女 一紅

雉の声夕日も影を踏えづし　七尾 道路

起こせぬ宿の黎明やきじの声　為谷

打ちまはす桃をもなまけや雉の声　古由

一口に散さ道やきじの声　京 子鳳

あらそふ尾の野木や杉の雉　源埔

何とらえてあらの殺や杉の雉　岸扉

心ある飛山ハ笑ふや雉の声　太阜

告天子（ひばり）

りく笠のまはりく圍にさひだりかな　加賀金沢 里遊
みつミつ岳に入さりなひだりかな　李園
圍(ダル)い日の中にいくつもひだりかれ　涼宇
招くまでその宮るひだりかれ　双兎
夕ひだり麦より出て麦圃(バクホ)　尾張 英牛
月見てそよかきりや夕ひだり　某所 双羽
うくひちの一さしのぞむひだりかな　七尾 司雅
うしろかり肌中の代沢(セワ)や夕ひだり　甲斐 吳江
かりむしさ目陰(メガミ)のかげるひだりかな　祇翠
蓬(ヨモギ)乾(ホセ)ばかりの出てまるひだりかれ　涼城
ちきく日をこゑへつめけりひだりかれ　西羊

かりてうの羽寺人や夕ひだり　涼奥
箕巻(ニイ)て船のまくらや夕ひだりかな　見凡
傘の背中でかはくひだりかれ　柳四
小蔵の峯(コブシ)もちりれてひだりかな　吟風
界ん日に後あくしめるひだりかな　秋午
日の暈(カサ)の裏できへまる　先天にかな　上毛桐生 一計
日の上に赤ってかれりひだりかれ　淡圭

知更雀(こまどり)

古きまどりや旭とのせて起(オキ)まハア　武蔵小倉 箕笠
こまどりや囀(サイ)く雜るを告にまる　涼城

宇曾(ウソ)　漢名未詳

うその身柳の条の糸やまき　揚之

未都牟之理(ミツムシリ)　漢名未詳

寒山の秘蔵もさつくれ花むしる　維鳩

百千鳥(モヽチドリ)

八ツの耳叶ほしやもちどり　小倉　呂く

鶯が恋ぐ霞ではや百千どり　上毛　文睡

大ぞらのうら日や百千どり　冠子

鳥尾(とりのを)

まつるや所おきつ斬(テラツヽキ)き　周防山口　東扇

鷺も柳ほしげくさかる　仙台　桂夕

まつよ又何をしるそいしるき　越後　布川

鳥巣(とりのす)

とりの巣や紫藻(フヂ)もくハつて曳(ヒイ)てくる　秋田　左枝

何の巣とはもまつれかんこどり　西羊

黄雀(まくめ)

子よせとの当口きいて群(ムラ)すゞめ　武加陽 白扇

帰雁(かへるかり)

まくひし雁と別るゝとおそかれ　尾張 野水
はあまいの冷さめて帰雁　涼岱
尾をついて声もわかるゝ春の雁　笑妹
花踏め足ハ細し鳴るかり　一紅
北風のかるゝと見えてかりの声　迂子

燕(つばくら/つばめ)

じゞるや翔るよ瞬(マタヽキ)させてゆく　尾張 記候

濡(ヌレ)ながら傘(カサ)の下行燕かな　江戸 半路
濁(ニゴリ)ハ行影もちられ燕かな　吹合沢 巨井
粘鳥(トリサシ)士の私よハちらぬしるかな　下毛足利 梅志
蟻起(アリオキ)のひとしえうけてしるかな　松羽三田 哥夕
涂ちあけて汀の隠るゝ燕この部　武高尾 雄兎
白浪を一筋もしる燕かな　祇棠
隙(ウレ)月(ヅキ)もつるのかろさや跡つばめ　鳥林
宮(トリ)鋪(ヰ)は地を掃(スル)てするつばめかな　入楚
燕やよて去よへぶれて行　甘梅
抂陣の先へ巴るやむつつく先　冠子
撒(ヌキ)ちられつばめや里の西ながし　加賀金沢 蕉雨

古ゐへ土の化カヤむくつゞ先　帆竹
皆まいものして飛つゞめ気　笑林
生ながらつまんで見る燕この卵　琴詩
飛ちる羽節(ヒヤ)して八のく燕哉　祇聟
燕やこまるをよれバ足も有ル　源愛

水鳥帰

萍(ウキクサ)に蓋やよめこて帰る鴨(カモ)　大和芝村 太呂

鹿解角(おとしづの)

落て皆女ごゝろやちるのしか　兎游

是花とハ今齡甑やおとし角　深奥

猫恋(ねこのこひ)

屋棟に隔てゝなうしれ猫の恋　いせ四日市 猿安
恋(コヒ)ゆゑに叶ひやねこのこひ　江戸 雨篁
人と隔る乳られてや猫のこひ　江山田 里史
唯ひとへ恋に眠やねまの恋　城下言田 車琴
泣ぬれてしきめくや猫のこひ　熊谷 呉雲
拘橘(カラタチ)と北田越ありねこのこひ　猿四
軒滴(アマダレ)ハゆるさぬ宮や猫のこひ　洗雪
案宿(アナ)てくれと思だんねこの恋　江戸 伊与

啓蟄(むしいづる)

空樹(ウツホギ)やこけぬ中より蟻の出る　大坂 麦兎

其の穴今出ぬ蟻と弥勒とも　伏見 任口

おびとよい石竜子(トカゲ)や人を恐るし　大坂 来山

蝴蝶(コテウ)

飛んでハ背中の見えぬ胡蝶かな　城棠

蝶々や風の吹かもひらつまく　去路

蝶々やあの云ふまゝにおとろうて　百丹

蝶々や花の上下あしらえて　足利 千山

蝶々や隠しものまで照りけり　上毛おたて 素倫

蜂窠(はちのす)

蜂の巣や狩(カリ)し己が隣の軒　上毛新町 禹貢

蜂のちや一戸(ヒト)室くよ老て来　お稲 麦汀

虻(あぶ)

虻の目の日ヵ暗ろて昼会点　支考

かくれがや赤(アカ)染ぬ障子(セウジ)に虻の声　山城日岳 仙行

蝿(ブクハ)

かく田のころも志つて蛙なれ　一ゑ
○○よ日ハたさまりてかはづ川に　喜れ
仏ならハあの志づまりて蛙なれ　涼袋
蟄(スツポン)のいよく跳(ダ)止る蛙この郷に　超波
百姓の一かまへづゝこのかはづ川に　江戸 杜谷
涅槃ゆ日を摺(スリ)こむる蛙に　大和 固採
飛(ヒ)びくに鳴ぬ田もあるかはづ川に　祇丞
曳(ソ)芝台(ウテナ)を四隅(ヨスミ)でおぶる蛙なれ　五柔
猪を皆あつまりて居るかはづ川に　汶上
乾ぬ日ハ入れてかはづ川に　李北
照る日すも渇衣(カツハ)ならさぬ蛙なれ　兎士

鳴はへぶのみこむかはづ川に　柳居
君よいやれて来る蛙この郷に　左文
這(ハヒ)出して奥のあるく蛙この郷に　近八情 再一
あふみも一字撒(ヒカ)せて蛙に　武村居 雨牟
是ゆれバたれ飛ハ居ぬ蛙なれ　下毛那に 律為
水と出る七月八日してかはづ川に　素竹
吉常が娘(ムスメ)女の口出せ蛙なれ　漁遠
乳つりく枝も流れてかはづ川に　ぬ丸
水くつりく吊(ツル)掵(ベ)まさりく蛙に　采二

田螺(たにし)

けやうに鍬借る里の田うゑかな　涼宇

泥の数と成てうゑし苗　加賀金沢 漁子

霧の海雲の波やうゑしころ　素更

つかれてはよふ案るうゑかな　双飛

本の節も吹こむて眉うゑかな　金沢 有英

足跡はよごれし指やうゑしとき　江戸 三楚

耕しに堀につゞく田うゑかな　素筏

足あとを泗にて捿田うゑかな　雨笠

田ようてぬ跼じやうちう田の採　碓了

蕊のくさくて成ちうゑかな　桐糸

定まらい畔しと見せる田うゑかな　秋田 馬六

道のないなみを出るゑるうゑかな　李北

硯

水底へ一尺ましし硯かな　上毛矢田 涼楓

硯採猿のはゑやことし山　古路

素えてはこれい把櫂や硯とり　讃西 五仙

やまあとて海の溢涸や硯とり　桐原

寄居虫

髪腕は从もやらて寄居虫かな　江戸 其角

冷えし城を固める寄居虫かな　笑林

秋あれ一風うちいる寄居虫かな　汶上

揚まりつ見えかくしてかりかな　涼宇

介寄風

寄せまろや浪し揺れまてまとはれ女　武蔵 艸月

介寄や合せてゐてハたりいつじ　足利 女 梶菜

とひよせやそとさゝぬハかくさつみまし　鳥梅

かいよせや牡蠣殻尾様ハかまいかし　京 桂洲

うぐいすのみつもよせくう海渚　江戸 玉貞

耨圃

圃うちのあんてかける夕かれ　涼岱

さゝうちやめぐりあつける法し　玄路

はたうちや傍の傷掛み語るらん　公

圃うちの髪神さき晴天かれ　鬼堂

はたうちや挿す女より起てゐる　猿四

秧田

なはしろや泡してあるも豚つれ　涼節

なはしろや芽を出れまてハ松の氣　江戸 無岸

秧田やさくへわごしてかさう某　東起

麻蒔（あさまき）

麻まきや畑て貰（モラ）ふて帰てやる　双飛

あげまきやゆふめバ何る老浮（ギイ）しまる　不知

播種（たねおろし）

ゆらぬるものハ善なり種おろし　鬼塚

蕨（わらび）

おちこちやうちまちて居る蕨かな　乙路

鷚（ヤとり）の尾を捕（とり）もづせてわらび哉　王才

糕（モチ）になる拓ハ見とゞけぬ蕨かな　青千

松風ハのぼつてわらじ卯那　百川

中のよい人はわらびる蕨かな　笑林

云あてゝ見よしめと出れ蕨かな　西羊

一つかミちさしあけてわらび狩　呉燕

筆頭菜（つくし）

とじめかり枯てやうなりつくし　斗光

きえハゆげこみ草之筆（ツク）ハ（く）芽（シ）　秋午

かげろふの命もともあしはつくし　李超

降（ホ）りよなのらぬ屑（クヅ）ハ接（スギ）続（ナ）草や筆頭菜　鳥林

少みちり気のつくろふやつくし　安里

歇(ヤスム)日の寺子よき出るつくしかな　楚江

浜(ハナ)合の跡よ出てつくつくし　左詩

乳母(ウバ)の拾ふよちやつくつくし　笑林

足の跡それハ嬉やつくつくし　し路

蒲公英(たんぽぽ)

たんぽぽや一あらうけて雪のまゝ　箕山

たんぽぽや瓢(ふくべ)の口へさして来る　双飛

たんぽぽや花こらしてのびあがり　雲郎

春菊(しゆんきく　あづまきく)

春菊や先南山を笑ハせる　李兆

手うてもかゝげる道やあつまきく　竹支

茶花(ちやのはな)

茶の花や鶏の冠(トサカ)ものゝ見ゆるとき　蕉六

茶の花や車ごしや牛のこち　秋午

茶の花や取りとりき箸のうら　玄路

茶の花やいつ寄生(ヤドリギ)の来ふもけ　祇丞

茶の花や隠るゝ日とかきうてる　雲和

茶の花や咲(サイ)てハ人に言さのこし　麦舟

珊瑚菜（ぼうふう）

胡蘿蔔（ニンジン）にけんのてう勝がうにふ　京　暁山

野蒜（のびる）

畑圃（ハタウチ）まの味噌（ミソ）さへあれハみなひるふ　紀州大村　仙水

萵苣（ちさ）

あしこのもそうし減（ハル）やちさ圃　熊本　孤舟

藕堀（はすのねほり）

蓮根や先二三本上（ウヘ）でほる　東武小倉　如嵐

蓮根や掘搦（ホリ）ちかふて糸よ来る　いせ　秋至

萍始生（うきくさおひそめて）

萍やしばし遠よ出どころ　上毛若思　か波

紫籜（つのぐむあし）

水鳥のもち居おどろやあしのつの　ち鉄

捨舟をまけてもちるやあしのほ乃　仝

汀のうし筏へさうあしのつの　花明

甲板（フタバ）さくさがいちがいやあしのつの　城石

溶石（カルイシ）の押へしめてやあしのつの　上毛大田　淵水

水穴あけて流るゝやあきのつれ　小泉 謝舟
鶏子の影へ出るやあしたの　帯河
東の方とこれもよ山へしあきのつ　城棠
わりそしまる八尾くあしのつれ　仝
先しみいつれ卯葛蒲ぞ紫鮮　山花
水を出て鴨のまろぐやあしのつの　漁達

菊秧
秧でさへりいわしめ多う葉つくる　常河

菊ト栽　并分根

かのこりて花やと菊を植かへる　江戸 女 地海
色爪をんる葉のふ根ぞれ　祇丞

胡頽子
ぐミ一本秋田時の色てなし　武大桒 不崩

芥菜
かしなや一口るのむせてら　一方

野蜀葵
ねき根へ交えてゝそる こつな氣　武山大石 下国

辛夷

辛夷あけし枯木に花とうるそうり　小倉 文舟

草鞋大王の知らせに靸や辛夷　江戸 兵河

迎春花

こうだいハ春いおやら咲てまぬ　松前 白陀

黄梅やかまもとのあるべきを　涼湖

連翹

きんげうや莟に虹らんと下りて居ル　奈良 示行

山茶

おつばきあまたかさに挿でえる　路坡

折れけに花のあゐむくつばきかれ　眺石

鵯の吸殻おとれはだきさこの歩　江戸 娟負

散ハ八重花散堂となりおりつばき　棠江

精されさ枝を空にさるつばきこさハ　汝上

ひとへ日ハあるまる山茶ハ　武蔵居 艸羽

茶のしたに水うつ見せるつばきハ　乙路

従てまで咲の捨よつばきハ　一嵐

接枝（つぎほ）

姥の實のそやあをさする接枝哉　太皐
木の端の老くしなからも接枝かな　祇丞
つくさいはんのさかるつぎほ哉　涼帘
日あらくアるき服事のねまるつきほ哉　可卿
花咲と諦の禁呪つきほ哉　岷郎
縁むえて枯ぬうちなしつきほ哉　冬柿
何いものをこし来むと接枝かな　涼海
咲バ又優曇華なりとつきほ哉　冠子

出代（でかはり）

むかひりやかしげて垂て去のあと　百川
むかへりや返りよきそくれ井戸も哉　上毛赤児 艸志

雛像（ひいな）

塩竈を摸でうけをひな哉　希因
一とせの霰貌ハ見せぬひいなかな　百舟
入陸のひなや風詩のやぶれぐち　近江彦根 許六
樟脳のにほひ紫やひなあそび　雲郎
拙文で炬燵やぞれあそび　一嵐
あんふてよあめ害ハ出しひな拙ひ　一の光
ほそい月見せる乾きもひいな哉　涼帘

花嫁のあしおつてまるひれハ　涼宇

冬びなや尻目に恋のなき代ハうら　何坡

捏くに偶と添るもひゝなつれ　李小

桃の冊やひゝなの星見も衣領だう　六林

あひるや又ころんで懐に　江戸 貫至

寐入ハ一塩るし　いるあそび　安房花房 嵐洞

かくまゝてやうに小春のひゝなハ　青蘿

闘鶏　とりあハせ

進退に人の声頼やとりあハせ　去路

勝鬨の雛に知眉やかりのふ　上毛館林 芳楚

気のつよい人従リとりあハせ　出羽 長嘯

潮盡　しほひ

入物のかさくとみえて潮ひハ　兎士

中天へふわあしあけて潮ひハ　涼袋

灼鐺の碇着をとく潮ひかな　洗雪

辰こゝろの形に来まてしほひハ　百卉

拾に麦藁のまじるしほひかな　伊勢井貝 巴山

巨船へ梯の合ぬしほひかな　一鳳

んつしてよきのくしほひかれ　文東

陽炎にするのそらにしほひかれ　破了

わすれハこゝまてハまぬ汐遠し　一の由

見よくへ夕日のうへしほひかな　まれや多少

妹くのつまふて居るしほひかな　尼 素園

呉くの火尽く(ホツチ)花くしほひかな　七尾 喚青

足弱の瀛(オキ)も見てゐるしほひかな　毛郎

見るうちに松原去るしほひかな　かゞ小松 乃露

青柳の泥にしだるゝしほひかな　芭蕉

底つ飛(フッ)踏ハなうてしほひかな　古路

硯　採ことを

介殻(カヒカラ)の筆(ヒツ)架(カ)も添(ソヘ)て硯かな　伏見 秀律

烏賊(イカ)の墨拭(フ)いて見ルや硯いし　かゞ交城 一の柳

春雨　はるのあめ

菜の芽(メ)のかこち顔これじも　烏貢

橋またやむ矢立や春の雨　双飛

奥山へつくれの行やこられおも　武蔵松山 涼皐

踏青　あをきをふむ

まふて住む庵やあとさき踏どころ　江戸 金崃

壬生傳奇　きやうげん

身の程いふな聟に壬生の狙 上毛クラガノ 米水

御身拭（おみぬぐひ）

団ぐりの見えやよき仏身ぬぐひ 武州松戸 烏道

順峯入（じゆんのみねいり）

峯入やまぐるも山のさらふのし 涼袋

大ぶねや入手もよるハまつぐ 淡路洲本 花雷

峯入やおも路落まで笑てし 重郎

法花会（のまつり）

ゑありくるや陪めてゐの神 涼袋

鶍塞（ろよさぎ）

鶍かきぎや此光陰ハおすほし 涼袋

鶍かきぎやきいあさく消るころ 江戸 泊光

かきぎせに梅の出てゆくころ川 上毛小泉 暁棠

長日（ながきひ）

ながき日や鶯よハ飛鳥川 涼袋

ながき日やえの落るよ眠とまし 一鳳

ながき日やきみの掻画（カキ）流し 丹後三保 白道

秋もはや日もさしこむや不破のせき　孤竹

もゝ日やかぶりとふのむらしき　西華

もゝ日や桃の男見て老もせん　深城

田鼠化為鴽（でんそけしてうづらとなる）

いう化をてふみ變てうづられ　汶上

觜（クチバシ）よまさぐものゝえるうつらみ　入楚

さしばとて鼠もへらぬうづられ　凉帶

麦鶉（むぎうづら）

居所の踏れやしく麦うづら　仙鶴

鳥沖雲（とりくもにいる）

なかれ藤それに沖（イリ）ゆく雲のそと　一音

蠶（かひこ）

ゑるせりもにぬぐころさこぐ蠶かな　南斗

居所は始末の出来るかひこかな　玉貞

櫻貝（さくらがひ）

汲汲の浦（スワ）なちりまやさくらがひ　仲連

拾よても指あらはるやさくらかむ　花石

蛤ハ蝶となりて出くらこのし　双和

櫻棘鬣魚（さくらだひ）

おくる漁村の春やさくら鯛（だひ）　其翁

浮かまん人めの花やさくらだひ　蘭通

落花（カイシキ）の葉がくれもあるさくらだひ　可由

あれバ櫻鰭が似たるさくらだひ　大坂 巴三

釣竿てゆるやらしの櫻だひ　鳩渓

櫻魚（さくらうを）

花浪かおりかとや花ぐらうを　東起

烟の月と浪るハ昔丸さくらうを　城下にほ 浪とみ

小渓鰮（わかあゆ）

逆まよふ庭の流れ小あゆの群　玉貞

もう群れの流れてさくてれ小あゆ汲　涼袋

篝焚（カガリビ）を離てされハ小阿ゆられ　西羊

ころあゆや花の櫻に昇るまて　阿坡

日あたりハ水も芽を出て小あゆ汲　熊谷 蕪帆

烟の月の照らくせせ（ツメツ）小あゆの群　し鋕

ころあゆや氷のうこく瀬（ぬき）の中　其梅

水の痕（アト）経よてハのぼる小あゆかな　足利 守光

上簗(のぼりやな)

何ごとをおもひつめてやのぼりやれ　横戸赤穂 春帆
一寸の萠(キザシ)ハちやうしのわたりやな　仝 子葉
瀧(タキ)布とらえてみんとするのぼり簗　江戸 暁子

紫花地丁(すみれくさ)

児(チゴ)の手のころもにちるき菫(スミレ)哉　双羽
大石の透(スキ)間(ニ)もなやすみれ草　赤穂 双瓜
花(ハナ)守のみゝにさかりすみれ哉　江戸 園女
気あけぬ娘(ムスメ)女の猿やすみれ草　凉袋

よのいろをしめておかやすみれ草　暁石
塔しのひとつもあまるすみれ哉　舎舟
地橋(バシ)し野を蒔(ホキ)揃えるすみれ哉　希因
陵(ミサヾギ)の日の入るるすみれ哉　凉袋

荷花紫草(れんげさう)

荼毘(ダビ)ととなりて庵や紫雲(レンゲ)英(サウ)　信州根津 其青
根とかれバはりいゝやまれんげ草　丁子 錦子

茅鍼(つばな)

ゆきの斎も稚子もあつばな哉　越波

甘ゆとて火桑のもれるつくしかな　山田 冷也

鼠麹草 ははこくさ

みせよるむこの草子やははこ草　武州 女 調花

艾(ヨモギ)よるし花ざけなるしはしおくは　雨石

白頭翁 まゆはき まゆつくり

まゆはきもあるに野焼のなれて　麦林

まさ山も二つそろへてまゆつくり　東巴

薊 あざみ

痒(カユ)かりにるのよりむくあざみかな　出雲 麻三

挿(イケ)てから隠(ケタ)と披(サガ)すあざみかな　禹貞

おもいつく青絲(ヒゲ)花(コ)の跡(ナリ)や薊　出雲 女 ましん

挿(イケ)花にあおぐくてあざみかな　白枝

木瓜 ぼけ

水口へきたはましきり木瓜の花　武州 三楚

もう迎る先の陽(ヒナ)や木瓜の花　不派中 三

苞(ワラヅト)に根のある色や木瓜の花　西羊

裙帯菜 わかめ

ひき潮に芦の芽伸くかゝめ哉　伊豆網代 松倭

芋種(いも)

種芋や化(け)さぬ鼠の住て居る　紙鳩

桃の花

瞰(クハ)さげて何ゆへにあるやもゝの花　いせ山田 涼兎

何(ド)なる(コ)まし折てゆくし桃の花　涼帒

ても似る小袖もたなしもゝの花　希因

あほしてゆかれば風ありもゝの花　一瓢

笠着せて臼を休むやもゝの花　素筏

桃さくや園の甍(いらか)の紋ちらし　麦林

雛の一夜涼しもゝの花　三河 琳李

残れはまき獄らせは桃の花　越前福井 其葉

来てハ折牛の泥(ヨミ)やもゝの花　涼帒

碁(ゴ)にむけハ日もあるやし桃の花　雪叩

衍(タヾ)徳(ヅノ)ば碾(ウス)の音もゝの花　播州 文帒

捷径(ナカエチ)を乳母うけさやもゝの花　双飛

一里出て柏や笠やもゝの花　李小

あまそしハ浜もえつあてやもゝの花　雪郎

家く見るく睡(子)の笠や桃の花　賊石

麦園またの紙ありきのさち　上総八日市場 旧山

もしさくや花のいまはの椿（ツバキ）　江戸 田雪

麦蒔て落花くるゝやすもゝの花　百寿

櫻（さくら）

山櫻何（ド）処（コ）迄つゞくとても咲ちらし　兎士

よいものと笑ひ出しけり山さくら　加賀小松 女 麦妹

むしはまぬ中とやみし山さくら　加賀金沢 女 珈涼

つりがねの乳は子おもはせて桜がり　希因

あちもちや之つぎいとつや遅さくら　京 立圃

山彦（ビコ）もまぶ耳清（サヤ）て初さくら　八王子 其竹

めりさきも桜のにほひや初さくら　足利 樸雪

さけぐらへのしんせんやちり桜　其梅

栗まきや風の小袖や山さくら　三條 女 九琴

おもしろきれの錦やちりざくら　江戸 女 墨暁

山人は何の田にや来しきつね桜　希因

聞くのきらうなるはや初さくら　好年

捨られてまは静か（な）ちりさくら　安墨

風車うれぬ暁（ヒヨリ）でや遅さくら　西羊

行（ゴ）厨（タウ）の肆もそらでもつさくら　加賀金沢 五蓑

門内よ一いろゆかしさくらかれ　汶上

杉原の葉より出てさくらかな　太阜

花あさの今おぼえあるやまさくら　江戸 道砂

まづ咲し時のさてめや山さくら　几凡

明のさらく江にまかう山さくら　柳本 葉亭

折らぬ気に加て膝くずす桜かな　下総大田 琢相

蒼天(アラソラ)へ入つく道やまはさくら　涼宇

開帳ハおもてに出るや山さくら　温故

傍々に桜もうけるやまさくら　さいう 青坡

水へ出て散るも吉さり山さくら　暁棠

さびりての輪(ワ)になる紙や山さくら　三條 桐井

怖(コハ)うない石の枕やまさくら　下総葛里 玉斧

前途(カドイデ)をかしのまとめるさくらかな　越後新潟 子永

面々う行おとつまさくらかな　下総飯塚 野菁

行まるの桜おもしろや山さくら　可也

形りのよい山よりてあるさくらかな　篤牛

凡八重く梅のあほひや山さくら　梯風

まる人の折さくらえて山さくら　百舟

後(ハジ)かりる人で出られもつさくら　素圃

浅鶯う紙の火縄や山さくら　洗雪

鳥つかる人てらんつるる山や吉川桜　三條 麦舟

人の葉てさよ九柏よさくらかな　下総多古 文暁

又山よくれて桂よむさくらかな　深林

吉川へ笑みて流れてさくらかな　暁素

山桜ちるや小川のみたるま　千住大津 智月

湧て出るやうな幸あり山さくら　青蘿
何よりも晴れて詣し山さくら　素園
白粉に似たる木ハさくらかな　紫苑
我こゝろ物にかよふや山さくら　大和 女千代
おれハ人の背戸へ山さくら　希因
京もなる先達のや山さくら　涼袋
何めもこゝて木履のあとや山桜　仝
紅葉ほし炊ぬ曲突（ヘツイ）や山さくら　白枝
咲越て枝に一きや山さくら　東起
焼らくの家まで山さくら哉　京 浪乎
鶯（スヾ）鷁（カケ）をとられてまつはさくら哉　破了

松風ハ子の日の外てさくら哉　如本
待て飲む若の滴やとさくら　鬼洞
かすみの情もこつに白し遅桜　祇翠
哭（カイ）でくりすのふるまつや遅さくら　江戸 至翁
山路のおもしろさとや遅さくら　涼袋
錯ハうき拍子をしてや遅さくら　一氷
笑えてゐるもかづきやいとさくら　希因
花のある弟ねでハちるし糸さくら　し跡
ひきよせてかゞいて見る糸さくら　汶上
詠法のこゝも一字山桜　存義
咲くよきい市のさくら哉　江戸 紫紅

法螺貝は下ゆく風や山さくら　門瑟
そしりとてところえせて山桜　一音
秋るもののくゝる雲や山さくら　芭叩
瘦て京へくるや山さくら　双飛
細更雀のちらして通る桜かな　江戸 柳之
鶯なけは四ツぬとゆるせ神さくら　兎士
そよみうしみの宮ある神さくら　壬生 其桃
神さくらあけに細てかいらん　涼窓
老大のまぬるさし山さくら　仝
別清の宮にあつてさくらかな　仝
後先のたきさ山路やとをさくら　涼兎

茅よま二し晴のかこみるさくらかな　晄石
面白し石垣は據じて見るさくら　李心
消しもせぬあのよ急ぐし山さくら　仝
片里の道をやさくらさくら那　白枝
わかりとは形よ踏さぬさくらこのなれ　一嵐
山分けは梅よをうへさけさくらかな　仝
一日の空は桜でして山さくら　秩父大宮 貞丘
瓦山ののいろ島女や神さくら　兎士
屋も隠て来るさくらかれ　壬生 松琵
松原へ独る宮鳥や山はくら　双飛
おもくとられは木空の山さくら　漁吉

むらむらと花咲ハ笑ふ也山桜　城下高田 素路
谷へ出る雲のたつれやちり桜　武村山 子竹
初桜まつ返しに花けむこそ　伊賀 利雪
鴿(イヘバト)をとんでかり道や下りけるかな　武蔵 菜子
ちりつもんでやゝちさくらかな　同村 桂雲
毛氈(モウセン)に笠ならべて居るさくらかな　一嵐
山さくら二人(フタリ)さそへハ手折らん　雪郎
女どし旅でのぼるや山ざくら　素園
暮れぬの八重にまる日や山ざくら　松茶 素柳
外厨に一夜うつらくさくらの哉　乙路
人あつのちるを惜出たさくらかな　足利 玄芝

まくらたやあさぎに写るさくらかな　武蔵 素花

海棠(カイドウ)

海棠や天窓(アタマ)剃る子の顔のいろ　布周
海棠や涼ハ米度も明とまし　一石

梨花 なしの花

涼くと混(コロ)でしまし梨の花かな　吉路
雨へおつれ候ゐめてちるしの花　古木
日あたりを隠れて白し梨の花　佐原 古硯
懲(ニユズミ)の肉に花(ゲ)でやなしの花かな　武蔵谷 雨雪

羊躑躅（つゝじ）

陝梱（カスガイ）の穴よし排（ヒキ）いてつゝじかれ　支路

枝折れハ節くみありいハつゝじ　双飛

蒸（ムシ）て出そて赤絵のみやつゝじ　李小

金棣棠（やまぶき）

やまぶきの滴（シヅク）やみもあてしめん　呉江

やまぶきや蛙の鏬みたしてきゐル　破竹

やまぶきや瑠の杓（ヒシヤク）よついてまゐる　涼岱

やまぶきやまゝ圍静よ井戸もなし　希周

やまぶきの流をおくるやみのおと　胡秋

棣棠や鵙（モズ）よ隠れし金花（ヒハ）の声　許六

瑞香花（ぢんてうげ）

梅ハ散る樒（ツガ）せてあるやぢんてうげ　河内冨田林 士林

紫の戸よ御不の香りやぢんてう花　甲霸

木蓮花（モクレンゲ）　一名木蘭花

彫（ホリ）ものゝ名へハちりし木蓮花　秋午

けいろと尼のぬらりや木蘭（ラン）花　伊勢おおす 梧井

石南花（シヤクナンゲ）

山向の山居よ来て石南花　武小康也　桃以

やまぶしの心よ苔や石南花　東記

紫荊花

下闇の手もや紫荊（はなずはう）の花曇（ハナグモリ）天　陸形　里杏

笑靨花

巻減（ツキヘリ）とられバ折られてこてめぐる　武金沢　等竹

春風のあらしおろしやこてめくれ　其梅

郁李

花ながし池さく迦えぬこうめ哉　江戸　おま

神木の赤きもありてこうめ哉　足利　松里

玉棣（にハさくら）

花蓋て見る任居やにはざくら　武本庄　也車

五加（うこぎ）

垣越しよ縦の踏るうこぎ哉　涼宇

老僧の徳の手て居るうこぎ哉　仝

下やしきや摘（つみ）けるうこぎ哉　伺枝

採茶 ちやつみ

ちき日のけさをむかしよ茶つみ歌　柳居

菅笠の宇治へよせくる茶つミ歌　双飛

枝こしに襷(タスキ)のつゝる茶つみかな　西羊

梅新生葉 うめのミどりハ

こゝ梅の又緑して若葉かな　晩石

紫藤 ふぢ

行春の縁(ウンロ)ひなめや ふぢのはな　吾仲

小ぼうきに見をてかゝるやふぢの花　祇丞

楼の隙を八めれて紫藤の花　桃史

ほ(千)八さ蕾てあるやふぢのはな　一嵐

栗鼠(リス)の来て遠ひら顔やふぢの花　涼袋

ねびらいの眠(リ)や ふぢのはな　素園

松風の小ありてあるや ふぢの花　仝

うつれて日八入かゝり ふぢの花　加賀今泉 竹話

紫藤のふくらねしてゝ垂ハちりし　美濃岐阜 柳枝

脱(イ)て行ちよ花臥(フセゴ)やふぢの花　百川

下晴のたりりロありふぢのたな　江戸 風斎

午時(ヒル)りゝも又一日そ ふぢのたれ　いせ桑名 楓里

かちのぼりて供に後れけり　素園

め菜色のかゝりちりしかちの花　桜井魚隣 奐雲

手桃へ猿を伸ばりかちみだれ　其石

閼伽棚の上にハ霞でかちのむれ　城紫

山寺の塔へかけりかちみれ花　手江日光 一湖

春夕

春ハろに柴山寺ハあれど春の光　孝女

さびしさもこらへ力や春のくれ　下総大田 五綾

暮春

風もなや入られけり春のくれ　斗光

菜に凄きよしみの瀑布や春の暮　佐林 東奴

けふもや一枝簾のこぼれ　只風

三井寺へ陸ハかどりて春くれぬ　希岡

けふもや走花のハの二本で暮でし　今

ゆくまや跡にふられ草や山　加賀金沢 桃風

春のあれ蛙飛鳴ものもなし　世翁

日の暮る岩にまつりぞ春のくれ　下総八日市場 一声

蝶々のさげて来ちりぞ春のくれ　遠江山梨 甚七

来て折ル藤のうけや春のくれ　涼袋

我ものと花踏て春ハけりけり　五乙郎

吸露菴藏板